二年　ステップ１　解答

18　古文２　古文のリズムに親しむ

組	番号	氏名

歴史的仮名遣いや言葉の句切り、声の大きさ、間の取り方などに注意しながら、次の文章を繰り返し音読しましょう。

今井の四郎、木曾殿、主従二騎になって宣ひけるは、「日ごろはなにともおぼえぬ鎧が今日は重うはなったるぞや」。今井四郎申しけるは、「御身もいまだつかれさせ給はず。御馬もよわり候はず。なにによってか、一両の御着背長を重うはおぼしめし候べき。それは御方に御勢が候はねば、臆病でこそさはおぼしめし候へ。兼平一人候とも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらくふせぎ矢仕らん。あれに見え候、粟津の松原と申す、あの松の中で御自害候へ」とて、うってゆく程に、又あら手の武者五十騎ばかり出できたり。「君はあの松原へいらせ給へ。兼平は此敵ふせぎ候はん」と申しければ、

【現代語訳】

今井四郎と木曾殿と主従二騎になって、木曾殿が言われるには、「これまでは何とも感じなかった鎧が今日は重たくなったぞ」。今井四郎申すには、「お体もまだお疲れになっておられません。御馬も弱っておりません。どうして一領の着背長を重く思われるはずがありましょう。それは味方に軍勢がありませんので、臆病からそうは思われるのでしょう。兼平一人ではございますけれども、他の武者千騎とお思いください。矢が七、八本ございますので、しばらく防ぎ矢をいたしましょう。あそこに見えますのを粟津の松原と申しますが、あの松の中で御自害なさいませ。」と言って、馬を急がせていくうちに、また、新手の武者が五十騎ほど出てきた。「殿はあの松原にお入り

木曾殿宣ひけるは、「義仲都にていかにもなるべかりつるが、これまでのがれくるは、汝と一所で死なんと思ふ為なり。所々でうたれんよりも、一所でこそ打死をもせめ」とて、馬の鼻をならべてかけむとし給へば、今井四郎馬よりとびおり、主の馬の口にとりついて申しけるは、「弓矢とりは年来日来いかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば、ながき疵にて候なり。御身はつかれさせ給ひて候。つづく勢は候はず。敵におしへだてられ、いふかひなき人の郎等にくみおとされさせ給ひて、うたれさせ給ひなば、『さばかり日本国にきこえさせ給ひつる木曾殿をば、それがしの郎等のうち奉ッたる』なンどと申さん事こそ口惜しう候へ。ただあの松原へいらせ給へ」と申しければ、木曾、「さらば」とて、粟津の松原へぞかけ給ふ。

（『平家物語』巻第九「木曾最期」より）

注 歴史的仮名遣いに注意しよう。

「よろひ」（ヨロイ）「今日」（キョウ）「給はず」（タマワズ）「候へ」（ソウラエ）

「思ふ」（オモウ）「かけむ」（カケン）「高名」（コウミョウ）「口惜しう」（クチオシュウ）

ください。兼平はこの敵を防ぎましょう」と申したところ、木曾殿が言われるには、「義仲は都で最後の合戦をするべきだったのが、ここまで逃げて来たのは、お前と同じところで死のうと思うためである。別々のところで討たれるよりも同じ所で討死にもしよう」と言って、馬の口を並べて駆けようとなさると、今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の口にとりついて申すには、「弓矢取りは常日頃、どんな功名がありましても、最期の時に不覚をすると、長い間の疵となるものです。お体はお疲れになっています。あとに続く味方はありません。敵に間を押し隔てられ、つまらぬ人の家来に組み落とされて、お討たれになったら、『あれほど日本国にその名が聞こえておられた木曾殿を、誰それの家来がお討ち申した』などと人が申すのが残念です。ただ、あの松原にお入りください。」と申したので、木曾は、「それならば」と言って、粟津の松原へ馬を走らせて行かれる。